慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルクソンにおける単純な生への回帰
Sub Title	Retour à la vie simple chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2019
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.12, (2019.) ,p.139- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20190000-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける単純な生への回帰

西 山 晃 生

はじめに

『道徳と宗教の二源泉』（1932、以下『二源泉』）の末尾において、ベルクソンは「単純さへの回帰 un retour à la simplicité」（DS 319）「生の…単純化」（DS 320）に繰り返し言及する。さらに、シュヴァリエとの対話では、「単純な生への回帰」が、「人々の精神の中にある大きな問題」に対する「唯一の治療薬」であり、また『二源泉』から引き出される「教訓 leçon」であるとまで述べる[1]。だが、「単純さ」とは何か。それが「生」とどうかかわるのか。「回帰」とはどのようなことか。そもそもなぜ「単純化」が必要なのか。こうした当然生じる疑問に対して、ベルクソンの記述は必ずしも明確な答えを与えてくれるわけではない。ベルクソンは『二源泉』より前の著作でもしばしば「単純さ」に触れており、その記述を参照すればある程度の見通しは立つのだが、『二源泉』の結論部では彼自身の時代診断が入り込むので、その理解も含めて新たにとらえなおす必要がある。

＊　ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号の後に Quadrige 版の頁数を付した。
DI: *Essai sur les donnéesimmédiates de la conscience*, 1889
MM: *Matière et mémoire*, 1896
EC: *L'évolution créatrice*, 1907
ES: *L'énergie spirituelle*, 1919
DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion*, 1932
PM: *La pensée et le mouvant*, 1934

1　Chevalier (1959), p.199.

本稿は以下のように進む。第一章では『意識に直接与えられたものについての試論』（1889、以下『試論』）、「形而上学入門」（1903）、『創造的進化』（1907、以下『進化』）における「単純さ」をめぐる議論をたどる。第二章では、『二源泉』においてベルクソンが「閉じた社会」「開かれた社会」について論じるにあたって「単純さ」の概念が果たした役割を確認する。これらをふまえて第三章では、ベルクソンが提示する「治療薬」「教訓」の性格を探る。

1 「単純さ」の諸相

1-1 『試論』における二つの「単純さ」

『試論』第三章の冒頭において、ベルクソンは「自然に関する二つの対立する学説」（DI 105）として、機械論と力動論を比較している。機械論は惰性の観念から出発する。物質は惰性的なもの、つまり固有の具体的な性質を持たず、必然的法則に支配されたものである。物質について何かを明らかにすることは、その法則を理解することに等しい。ただ一つの法則だけがかかわっており、未来のふるまいを完全に予見できるとき、物質のありかたは「単純である」といわれる[2]。われわれの触れる事実が多少なりとも豊かな性質をもった具体的な姿を示し、偶然的で予見しがたいものに映るとすれば、それは複数の法則がかかわっており、いわば法則の「交差点 point d’intersection」（DI 106）になっているからだ。

力動論は意識をモデルとして、自由に活動する力、つまり自発性の観念から出発する。惰性は「この観念を少しずつ空虚にしていくことで」（DI 105）はじめて得られる。逆に惰性から自発性の観念を導くことはで

2 「こうして、惰性の観念は、定義そのものによって、自由の観念より単純であり、等質なものは異質なものより単純であり、抽象的なものは具体的なものより単純である」（DI 106）。

きない。こうした「派生 filiation」（DI 106）関係において最初にあり、自足しているものが「単純である」といわれる。力動論にとって「法則の軛を逃れる」（DI 105）事実はこの意味で単純なのであって、法則は事実の「象徴的な表現」（DI 105）に過ぎない。

こうして、機械論は法則を、力動論は事実を「絶対的な実在」（DI 105）に仕立て上げる。ベルクソンは、両者のどちらが自然に関する学説として優れているのかを決定しようとしているのではない。両者の立場は、「単純さ」という語の理解へと帰着する。われわれがここでのベルクソンの議論から得られるのは、「単純さ」の二つの用法である。

機械論にとって、物質が示す「単純さ」は、どの法則を採用するかによってありかたを変える。また、関わる法則が多くなるほど事実は複雑なものとして表象されるので、「単純さ」は程度を容れる。これらの意味で、この「単純さ」は相対的なものだといえる。力動論にとって、惰性の観念から活動性の観念を導くことができないのは、活動性が最初に、それ自体として表象されるよりほかないからである。つまり、力動性は他の何にも還元されない。この意味で「単純さ」は絶対的なものである。ベルクソンはしばしば「単純さ」という語を、特に注意しないままこれら二つの意味で使い分けるので、両者を区別するために本稿ではそれぞれを「相対的な単純性」「絶対的な単純性」と呼んでおこう。

1-2　「形而上学入門」における単純な行為としての直観

「形而上学入門」においては、「根本的に異なる」（PM 177）二つの認識手段として分析と直観が区別される。分析は知性によってなされる作業であり、概念を用いて事物を記号化したうえで、記号によって事物を再構成し、その「知的等価物」（PM 186）を得ようとする。無数の事物を有限な数の概念よって記号化するときには一般化が避けられないから、その作業は対象に固有な性質を捨象し、他の多くの対象と共通したものへ還元して

しまう。概念が「抽象的で一般的で単純な観念」（PM 185）と呼ばれるとき「単純な」という形容詞は、固有の性質を欠いた、全体を再構成するための要素という意味で用いられている。したがって、この「単純さ」は相対的なものである。

他方、ベルクソンが「ホメロスの詩句が私に与える単純な印象」に言及するとき、あるいは「腕を持ち上げる際、あなたは自らがなす運動の単純な知覚を内的に持つ」（PM 180）と述べるとき、「単純な」という語は異なった意味を持つ。いずれの場合も、構成要素を取り出すことはできるだろう。しかし、詩句を単語や文字の、運動を静止状態の組合わせに還元してしまったら、「印象」や「知覚」は全く別のものになってしまう。詩句や運動は動きとして「一挙に、全体的に」（PM 179）与えられるからこそ、そのものにしかない質が理解されるのである。ここでの「単純さ」はこうした動きの連続性、未分離性を指す。それが対象の固有性、具体的な性質を支える。

直観とは、まさにこの固有で具体的なありかたをとらえる認識の仕方である。対象を記号に置き換えるという方法の性質上、分析が不動のものにしか働きかけられず、また記号の選び方によって様子が変わる相対的な認識であるのに対して、直観は対象の動きに寄り添うことによって、その対象が持つ唯一で絶対的なものに触れる。ベルクソンが直観を「内部に身を置くこと」「共感」（PM 181）と規定するとき、それは対象をその絶対的な「単純さ」においてとらえることと等しい。そして、記号に頼らず「一挙に、全体的に」対象をとらえようとする以上、「…直観は、もしそれが可能ならば、単純な行為である」（PM 181）。

分析は対象の動きをとらえることに一貫して失敗する。しかし、知性は直観に比して単に「無力」（PM 213）を示すだけではない。そもそも対象に合わせた記号や概念を形成することができるのは、対象が把握されているからだ。そうした先行的な把握は直観によってなされるほかない。したがって、直観に先立たれなければ知性が分析を行うことは不可能である。

直観は「分析の背後に隠れて分析を動かす単純な行為」（PM 225）にほかならない。実際、科学にせよ哲学にせよ、偉大な発見や改革は常に直観から始まっていた[3]。

しかし、直観は絶えず「逃げ去り」（PM 226）、たちまち「固定された、判明で、不動の諸概念」（PM 218）に置き換えらえてしまう。これらの概念を可能にした直観は「忘却」（PM 216）され、われわれはすべての思考が既成の概念から出発するかのように誤認する（PM 215）。人間の思考はごく自然にこの道筋をたどる。これは知性に主導される人間に課せられた条件であるといってよい。哲学は「単純な直観をとらえなおす」（PM 197）ことを通じて、こうした「習慣的方向を逆転する」（PM 214、強調はベルクソン）。そして、まさにそのことによって「人間の条件を超えるための努力でなければならないだろう」（PM 218）。

直観には熟慮が必要である。一つ一つの対象が異なる以上、対象に入り込む作業はその都度やり直されなければならず、したがって「新しい対象に取り組むたびごとに〔その一つ一つに対して〕新たな努力をなす」（PM 197）必要が生じる。そのうえで、一般的でも抽象的でもない、「その対象だけに適合する」（PM 197）概念を作り出さなければならない。絶対的な意味での「単純さ」は、与えられるものというよりは、得られるものになる。

こうして、直観は忘却されていなければありえたはずの認識であると同時に、その都度求められるものである。絶対的な「単純さ」を取り戻すことと、それを新たに獲得することは、同一の試みである。次に、それが「人間の条件を超える」こととどうかかわるのかを見よう。

3 「形而上学者であるのと同時に科学の改革者でもあった近世哲学の巨匠たちが、実在的なものの動的な連続性についての感情を持たなかったなどと言うことがあるだろうか」（PM 219）。

1-3　『創造的進化』における単純な運動としての生命

知性を相対化し、知性ではとらえることのできない実在へたどり着くために直観を思考の方法として鍛え上げるという方針は『進化』でも一貫している。

『進化』において、知性の相対化は生命の脱神秘化という形で示されるだろう。知性が生命進化の分析を試みながら、それを神秘的なものとしてしか表象できなかったら、その試みは失敗している。ベルクソンは、生命進化を前にして知性が驚嘆せざるを得ないということ、その結果生命をとらえ損なっていることを明らかにする。

「私たちが眼のような器官の見事な構造に驚くとき」（EC 96）、この驚異は何に由来するのだろうか。多くの部分が相互に連携する見事な秩序だろか。「眼が開けばすぐに視覚が機能する」（EC 89）という事実そのものだろうか。そのどちらか一方ではない。これら二つの一見相容れない性質が共存することにこそ人は驚くのである。「器官が無限に複雑であることと、機能が極めて単純であることとのこの対照こそが、間違いなく私たちの眼を開かせるだろう。」（EC 90）

しかし、この対照だけでは驚異の十分な説明になっていない。次に、ベルクソンは構造と機能とについて、私たちがどのように理解しているかを検討する。知性が生物の進化について考えるとき、どうしても人間の営みを基準にしてしまい、製作というモデルで考えることが避けられない（EC 93）。たとえば眼を複雑な構造としてみなし、それが既知の諸要素を寄せ集めたものだと考えてしまう。複雑な構造の表象には、それを組み立てる複雑な手順の表象が伴うのだ。しかし、眼の機能が単純であるということは、その実現に中間がないことを意味する。製作が完全になされれば眼は見えるが、少しでも失敗すれば見えない[4]。構造が複雑で製作が完全

4 「機能が単純であるというまさにその理由によって、この無限に複雑な機械を

に成功する見込みなどなさそうに見えるからこそ、現実に眼が機能していることにわれわれは驚くのだ。「われわれの驚異の根底には…秩序の完全な実現は一種の恩寵だという考えがある。」（EC 96）

しかし、まさにこの点で製作モデルは破綻しているとベルクソンは考える。手順が複雑であるということは、それが分割可能であるということを意味するだろう。製作モデルによれば、どこかで失敗したり中断したりした場合、器官の秩序は一部のみ実現することになる（EC 96）。しかし、前述の理由により眼の機能は完成度の度合いを容れない。したがって、眼が既存の諸部分を組み合わせることによって製作されたという理解は実態に即していない。眼を開いて何かを見るような連続的で不可分な行為の成り立ちを説明するためには、少しでも部分を想定してはならないのだ[5]。単純な行為を実現するための進化はそれ自体「単純な運動」（EC 178）である。この生命の動きをとらえることができないとき、たちどころに複雑な構造が見て取られる。そして「…秩序はわれわれがひとたび全体を寄せ集めとして表象した後、初めて驚くべきものに見える」（EC 91）。以上のような「単純さ」と「複雑さ」との関係は次のように一般化される。

> 一般的に、同一の対象が一方では単純なものと映り、他方では無際限に〔多数の要素から〕構成されているように見えるとき、これら二つの外観、あるいはむしろ実在性の度合いは同等の重要性を有していない。このとき単純さは対象そのものに属し、無限の複雑さは以下のものに属している。すなわち、私たちがこの対象を周囲から見るときの眺め vues であり、感覚や知性が対象を表象するとき用いる並置された記号であり、より一般的には、私たちが対象を人為的に模倣しよう

構築するとき、自然がわずかでも気をそらしたら、視覚は不可能になってしまうだろう」（EC 89）。

5 「秩序は部分的なものではありえない。なぜなら…秩序を生み出す実在的な過程は部分を持たないからだ」（EC 96）。

とするとき用いる、対象とは異なった秩序の諸要素である。しかし、対象はそれらの諸要素とは本性が異なり、共通の尺度を持たない。（EC 90、強調はベルクソン）

生命の進化は製作ではなく分岐によってなされる（EC 90）。諸傾向が分岐することによって、それぞれ有利な仕方で物質に働きかけることができるからだ。こうして知性と本能という二つの傾向が判明な形をとるようになった。本能は生命の統一性そのものに根拠を持つ（EC 168）。ある種の動物同士が、互いの生存に有利になるよう協力するとき、そこには有機的組織化とほとんど区別されないような形で本能が作用している。本能は意識を伴わず、またあらかじめ決まった特定の対象にしか働かない。これに対して、知性は意識的なものであり（EC 267）、また対象を無際限に拡げることができる。

知性も本能も、それぞれの種において一方が優位を占めているだけであって、他方が完全に排除されるわけではない（EC 136-7）。しかし、いずれにせよ「核」として固定されてしまった能力は進化の結果に過ぎず、そうした能力を負わされた生物は生命の単純な運動そのものから取り残されてしまっている（EC 193）。他の生物種がすべてこのような「袋小路」（EC 266）に入り込んだままであるのに対して、人間だけがこの状況から脱却することができる。『進化』では、「人間的条件の超越」にこうした生物学的な含意が加わるのである。そして、ここでも直観がその役割を担う。

直観とは、拡張、精錬された本能である（逆に、本能とは制限された直観にほかならない）。本能は知性の力を借りて再び直観になる。「利害を離れ、自己を意識し、対象について反省して、その反省を無際限に拡大することができるようになった本能」（EC 178）こそ直観である。人間にとって直観は、知性や本能のように先天的に与えられた能力ではない。消えやすい直観を定着させるためには集団的、継続的な努力が必要である（EC 239-240）。直観を取り戻すことは「創造的進化を再び生きる」（PM 95）

ことに等しい。人間が与えられた条件に甘んじることなく、再び創造に参与できるか否かは直観の成否に左右される。物事を無限に複雑化する知性を、単純な直観で補うことができるかどうかに、人間という種の命運がかかっている[6]。

しかし、「人間の条件を超える」ことはそれほど重要なのだろうか。また、なぜ求められるのか。こうした問いに答えるためには『道徳と宗教の二源泉』を参照しなければならない。

2　「単純さ」と社会

2-1　三つの生物学的前提

『二源泉』においてベルクソンが「閉じた社会」を論じるとき、三つの生物学的知見が前提になっていると考えられる。

個体性についての洞察を最初に取り上げよう。生物の個体は、部分の異質性と機能の相補性によって特徴づけられる（EC 12）。個体化とは、多数のものを取りまとめて一つの組織を形成する運動である。したがって、個体とはそれ自体一つの組織にほかならない。一つの個体であること自体が、より大きな個体の一部になることと不可分である。「…個体性は自らの敵を家に住まわせている」（EC 13）。こうした生物としての個体のありかたをモデルとして、個と社会の関係も考えられている。

> 諸個体は社会において並置される。しかし、社会は形成されるや否や、自らも個体となるように、新たな組織へと諸個体を溶かし込もうとするだろう。それ〔個体となった社会〕は、今度は自分自身が新たな結

6　この点に関しては、レヴィナスの以下の記述を参照。「ベルクソンの哲学的直観は、人間の具体的生と宿命とに緊密な形で結びついている」（Levinas (1930), p.219）。

合の構成要素となりうるだろう。（EC 259-260）

あらかじめ並置された諸個体が「溶かし込まれる」のではなく、新たな組織の一部となることによって初めて諸個体は判明な形をとる。個体の相対性から個と社会の相補性が帰結する。個体と社会とは対立するのでなく、たがいを形成し、条件づけ合うのである。

第二に、個体は要求に応じるという仕方でしか存続しえない。生物の身体は感覚－運動系であるとされる（EC 125）。身体は外部からの刺激を受けて「適切な反応」（MM 89）あるいは「適切な運動」（ES 43）をすることを目指している。これは単なる環境への適応で満足する動物であろうと、より高度な生のありかたが可能である人間であろうと変わらない。こうした程度の差異は脳の構造に由来する。脳は感覚と運動のあいだにあって、両者の関係を調整する、行動の器官である（MM 26）。脳が複雑であればあるほど行動は不確定となり、時間的な猶予が生じる（MM 28-9）。しかし、どれほど脳が高度になっても、行動の要求から逸脱することはできない。身体の諸部分が平衡し、また適切な行動をなすことによって外部環境とのあいだに平衡を保つことが「生命の一般的目的」（MM 89）である。

『二源泉』の冒頭で明らかにされているのは、人間が命令に従う習慣を身に着けてしまっている、という事態である（DS 1-2）。換言すると、人間は責務に付きまとわれている。責務とは、周囲からの要求を示すものであり、その「極限」（DS 3）が社会にほかならない。ここでも、人間の社会的なありかたは生物としてのありかたをモデルに考えられている。いずれの場合も要求への「適切な反応」と平衡の維持が目指される。

第三に、獲得形質の遺伝に関して、ベルクソンは―その時々で多少ニュアンスに差があるとはいえ―概して否定的であり、たとえ認めたとしても積極的な意義を見出さない（代表的な箇所として EC 77-85）。後天的に形成された能力や習慣が遺伝しないということは、人間の本性が不変であ

ることを意味する。確かに実際の人間社会は（遺伝ではなく）多くの人々によって伝えられた習慣や生活様式によってその大部分が支えられているだろう。したがって、年代的、地理的に隔たった社会のあいだには相違点が目立つかもしれない。しかし、「分厚いニス」（DS 27）のような形でいくつもの層をなし（DS 292）、各々の社会を覆っている習慣の下に「人類が一丸となっても動かすことのできない」（DS 291）本性が隠されている。人間に限らず、生物種とは一つの停止であり、種であることに甘んじる以上、限られた形で進歩はできても根本的に変化することはできない。こうして、人間が自身の力で自身や社会のありかたを根本的に刷新し、進歩し続けることを信じるような「見当違いの自尊心、浅はかなオプティミスム」（DS 289-290）は退けられる。

以上から導かれる社会像は次のようなものである。個人が社会を、社会が個人を支えるため、結局両者が協力して自己保存を目指すことになる[7]。したがって、社会はどれほど大きなものになっても他の社会からの脅威に備え、潜在的に敵意を持ち続ける（DS 28, 55）。また、そのようなありかたは自然によって定められたものであり、変えることができない。排他性および不変性という二つの意味で社会は「閉じた」ものである。

2-2　閉じた社会に内在する危機

さて、このような個人と社会のありかたは常に危険を抱えている。生物において、特定の器官が独立した形で活動することが身体を解体の危機に導くのと同様、知性を持ち利害に目覚めた個人が利己的にふるまうことは社会の安定を脅かすだろう。また、要求とその実現との関係が込み入ったものになればなるほど、個人が、そして社会が自らを保つことは困難に

7 「人間は社会と一体をなす。人間と社会は一緒になって、個人及び社会の保存という同一の課題に没頭している」（DS 33）。

なる。

> ある高潔な魂の持ち主であり、自己犠牲の熱意を持っている人が、「全人類のために」働くと考えると、急に熱意が失われるということすらある。目的があまりにも広大で、結果があまりにも分散しているからだ。…もし間隔と、一つずつ通過しなければならない無数の点のことだけを考えるならば、ゼノンの矢の場合と同じく、出発する勇気は損なわれてしまうだろう。（DS 32）

要求を満たすためになすことが多くなり、問題が複雑になるほど多くの偶発時にさらされ、成功の見込みは薄くなる。こうした見通しの悪さが決心を鈍らせる。ここでは「複雑さ」は意志をくじくものとして現れる。

ベルクソンが「仮構機能」と呼ぶ働き、またそれによって生み出される迷信や信仰、「静的宗教」などは、行動を動機づける表象を形成したりあらかじめ準備したりすることで、このような危機を未然に防ぎ、個人と社会の平衡を保つ役割を果たす。だが、そこで生み出される表象は、人が直面しうる問題と同様に多くの個別的要素が関係しあっているため（DS 219）、複雑さという根本的な問題を回避することができない。

2-3　「特権的人格」と「単純さ」

要求に応じるという仕方で周囲との関係を調整すること、行動を通じて社会を形成・維持し自らも個体として形成・維持されることは、種としての人間に課せられた条件である。だが、種とはそれを創造したエネルギーから見れば一つの「停止」（DS 50）にすぎず、社会とは「生の限定の一つ」（DS 103）でしかない。社会的生が不可避的に複雑な状況をつくりだし、複雑な状況が不可避的に行動すること、生きることの困難さをもたらすならば、これを克服するためには種としての人間をどこかで乗り越える

必要がある。ベルクソンが「特権的人格」（DS 30）「特権的個人」（DS 48）と呼ぶのは、こうした乗り越えを自ら行う稀有な個人である。

> 通常、生命は人間種をその発生以来特徴づけてきた社会という形態の大まかな保存に専念するが、諸個人の力によって例外的にこの社会形態を変容させることができる。それらの個人はその各々が、新たな種の出現がそうしたであろうように、創造的進化の努力を代表する。（DS 98-99）

通常の人間であれば、数限りなく、複雑に絡み合う条件や問題を前にして行動への意欲がそがれてしまうのに対し、「特権的個人」はそのような問題など存在しないかのようにふるまう。問題を解決するというよりは、「解決すべき問題を解決したものとみなすことから出発する」（DS 306）。そして、その先まで一気に通り抜け、振り返れば問題が解消している[8]。

> とりわけ、この魂は物事を単純に見る。この単純さは言葉においてもふるまいにおいても強く響くものであり、それが複雑な諸状況のうちで魂を導いていくのである。もっとも、魂は状況の複雑さに気づいてさえいないように思われるが。（DS 246）

「特権的人物」が行動の人であり、意志においてその天才ぶりを示すとき（DS 56）、彼らは絶対的な意味での「単純さ」を体現しているのである。彼らはただ存在するだけで人々に対する呼びかけとなり（DS 30）模範と

8　なお、以下の記述も参照。「障害について推論している限り、障害はその場から動かないだろう。障害を眺めている限り、その障害は一つ一つ乗り越えていかなければならない諸部分に分解されるだろう。その細分化は際限なく続きうる。すべてを汲み尽くしたと告げるものは何もない。しかし、障害を否定すれば、それらのすべてをひとまとめに除くことができる」（DS 51）。

なる（DS 56）。呼びかけに応じ、彼らを模倣することによって、人々が「不断に刷新される創造へと」（DS 85）進むありかたをベルクソンは「開かれた社会」と呼ぶ。

ただし、「特権的人物」に導かれた人々によって「開かれた社会」が到来するというイメージには注意が必要である。そもそも、「閉じた社会」にしても「開かれた社会」にしても、完全な形で実現することはなく、実際に存在するのは両者の混合形態―「開かれゆく社会」（DS 283）―である。また、「開かれた『社会』」といっても、新たな創造に向かう以上、どのような社会であるかあらかじめ決まっているわけではないし、一人一人が創造に向かうのであれば、排他的な結束があるわけでもない。したがって、それは「閉じた社会」と並び立つような明確な輪郭を描くものではない。加えて、ベルクソンは「特権的人物」が誰であるかということを重視していない。「呼びかけ」を既に聞いてしまった一人一人がどのようにふるまうか、ということが重要である。このことは 3-3 で取り上げよう。

3　「単純さ」の必要性

3-1　二分法と二重狂乱

ベルクソンにとって、進化とは絶えざる創造であり、それが分岐という形で進むとされることはすでに見た。このような理解を受け入れると、生命の「推進力」（DS 313）が多数の傾向を未分離なまま含んでおり、それらが分岐することによって現実化したのだと考えたくなる。しかし、ベルクソンがたびたび強調するのは、分岐によって諸傾向そのものが創造されるという事態である。生物進化の場合、諸傾向の分岐はそれらの諸傾向を特徴とする「区別される複数の種」（DS 314）へと発展する。しかし、すでに一つの種である人間における心理的、社会的進化の場合、分岐によって生じた諸傾向は、同一の社会、あるいは一個人のうちで順番に展開す

る。優位に立つ傾向は、それを妨げるものがなければ歯止めがきかず、「狂ったように」（DS 318）進み、「破局が差し迫ったとき devant l'imminence d'une catastrophe」（DS 315）にようやくもう一方の傾向へ場所を譲ることになる。そして同じことが繰り返される。こうして、二つの法則が得られる。

> われわれが二分法の法則 *loi de dichotomie* と呼ぶのは、当初は単純な傾向に対する異なった視点でしかなかった諸傾向が二つに分解されるだけで、それらを現実化する、そのような法則である。そして、われわれが二重狂乱の法則 *loi de double frénésie* と呼ぶことを提案するのは、ひとたび分離することで現実化した傾向の各々に対して、今進んでいる道を終点まで―終点というものが存在するかのように―たどるよう求める内在的な要求である。（DS 316、強調はベルクソン）

ベルクソンは「歴史における宿命を信じない」（DS 312）と明言する。彼にとって、「避けることのできない歴史の法則は存在しえない」（DS 313）。その一方で、彼は（おもにヨーロッパの、という限定付きではあるが）歴史を観察し、これら二つの法則によって示されるような事態が、人間社会に大きな変化が生じる要因になっていると考える。そのように事が進むのは、それが創造を最も遠くへ推し進めることになるからだ。一つの傾向が度を越して進むというまさにそのことが「新たな環境に導き、新たな状況を創造する」（DS 315）。そして傾向の分岐、狂乱的な追求とその交代という過程によってこそ「量においても質においても最大の創造」（DS 316）が得られる[9]。

9　一つの傾向が限界まで進み、反対の傾向に取って代わられるとき、それまでに得られた成果がすべて捨て去られているわけではない。したがって、「振り子運動」のように二つの傾向を往復していても、同じ状態に戻るのではなくて絶えず前進しているのである。たとえば、自動車に関する以下の記述を参照せよ。

「知恵」（DS 315）は二つの傾向が協力し、相互に抑制することを求める。一つの傾向が度を超えて進むことには危険も伴うからだ。「破局が差し迫ったとき」といっても、いつそれが訪れるかを予見することなど誰にもできない以上、決定的な「破局」の手前で行き過ぎた傾向に都合よく歯止めがかかる保証などどこにもない。しかし、「十分に緊張した意志が、時宜を得て à temps 取り組むならば、打ち砕くことのできない障害など存在しない」（DS 312）。微妙な言い方ではある。時宜を失い、「破局」が現実化する可能性とともに、未来は法則ではなく意志にかかっていることが、ここでは示されている。この点に関しても 3-3 で触れる。

3-2　複雑化の脅威

ベルクソンが「特権的個人」として名指す人物のなかにはソクラテスなどの「道徳的英雄」も含まれるが『二源泉』の第三章ではほぼ神秘家にのみ言及される。神秘主義的な素質のある人物が現れても、社会が極めて不利な「物質的状況」（DS 240）にある場合、その力が十分に発揮されることはない。インドにおいて完全な神秘主義の出現が遅れたのはこのような理由であるとベルクソンは考える。「数百万人にも及ぶ不幸な人々が飢饉によって餓死する時代に何をすればよいのだろうか」（DS 239）。

したがって、人間を変えるためにはまず劣悪な物質的状況から脱却しなければならない。ベルクソンが「機械主義」と呼ぶのは、新たなエネル

「そして、今日自動車の所有は多くの人々にとって究極の野心なのだから、自動車が与える比類なき有用性を認め、この機械のすばらしさを称賛しよう。その数が増え、必要とされるところにはどこでも普及することを願おう。しかし、単なる楽しみのためであれ、贅沢をすることの快楽のためであれ、自動車は近い将来今のようには求められなくなるかもしれない、と言っておこう。とはいえ、今日丁子やシナモンがそうなっているように自動車が見向きもされなくなることはないだろうし、われわれもそのように望む」（DS 323-4）。

ギーを導入し、生産力を上げ、人を過酷な労働や貧困から解放するためのものだった。そのようにして生活が改善されない限り、人々は行動への意欲を持ちえないし、神秘主義が伝播することもない。「神秘主義は機械主義を要請する」（DS 329）のである。

しかし、機械主義は「偶発的結果」（DS 329）によって、人間の別の面と容易に結びついた。贅沢を追求する傾向である。まず安楽が求められ、その後に快楽、さらには贅沢へと欲望が「漸増」（DS 323）したのではない。言い換えると、生命を維持するために欠かせないものが確保された後で必要のないものまで追い求めるようになったのではない。「初めに虚栄心があった」（DS 323）とベルクソンは断ずる。虚栄心は自他を比較することなしには成り立たないので「何よりも社会性 sociabilité を意味する」（DS 92）。どれほど利己的にふるまおうと、社会の中で生きることは周囲との複雑な関係の中で平衡を保つことである。贅沢の追求が機械主義と結びついたとき、手に入る物も比較される人も以前よりはるかに多くなり、より遠くの対象まで配慮することを強いられ、より入り組んだ手段を介さなければ目的に到達しなくなる。ベルクソンは「二重狂乱」の一方をこうした生の複雑化に、他方を生の単純化に見ている。

> …生の単純化と複雑化はまさに「二分法」から帰結し、「二重狂乱」の形で展開することがあり得るのであり、結局のところ、周期的に継起するために必要なものをそなえている。（DS 320）

> 人類は、自らのありかた exsistence を複雑化したのと同じくらい狂乱的に、その単純化を試みなければならないだろう。（DS 327-8）

生の単純化が意味することについては後に触れるとして、ここで確認しておかなければならないことがある。なぜ生の単純化は、単に可能であったり、予見されたりする（DS 320）だけでなく、「試みなければならな

い」のだろうか。この問いは 1-3 で残した「人間的条件を超える」ことの重要さをめぐる問いと、同じでないかもしれないが少なくとも方向性を共有する。いずれも、人間が今自分のある姿に甘んじてはいけない理由を問うているからである。

ベルクソンの記述は必ずしも明確ではない。しかし「人類は自らが成し遂げた進歩の重圧で、半ば押しつぶされ、うめいている」（DS 338）という箇所から、以下のようなものだと考えられる。人間は、環境に適応し、平衡を保ちながら生きてきた。環境との関係が複雑化することによって平衡の維持は困難になるが、そうした状況を乗り切る仕組みもまた、自然によって準備されていた。しかし、機械化とそれに結びついた贅沢への志向は、自然によって用意された範囲をはるかに超える複雑さをもたらし、人間が既存のいかなる方法を用いても手に負えないものになっている。今や、「人間的条件」を超えることなしには、「人間的条件」に従う生活すら続けられないのである。

3-3 生の単純化

生の単純化をめぐるベルクソンの記述は決して読みやすいものではない。ここでは、これまで本稿で区別してきた二種類の単純さと関連づける形で、二つの方向性を区別したい。

ベルクソンが複雑化した生に単純な生を対置するとき、その単純さは直接的には禁欲主義的な生活のことを指している（DS 318）。たとえば、贅沢な食生活の追求が止まらなくなったとき、そうした食生活が有害であると科学的に証明されれば、この傾向には歯止めがかかるかもしれない。「われわれの食生活が改められるだけで、工業、商業、農業に無数の反響が起き、それらは著しく単純化されるだろう」（DS 321-2）。確かに、このような質素さは複雑さの度合いを幾分か下げることになるだろう。生活を相対的に単純なものにすることで、複雑さはいわば中和される。これが第

一の方向である。

機械主義は、「自然が予見することさえできなかった段階にまで製作の複雑さと完全さを高め」（DS 333）、そのことによって多大なエネルギーを利用可能にした。ベルクソンはこうした機械を身体になぞらえるのだが、「この並外れて肥大した身体」（DS 330）は、一つの種であることに甘んじ、そこで停止している人間にはとうてい制御できないものになっている。したがって、この巨大な「身体」に見合うよう、人間は自らを根本的に変えなければならない。そして、機械主義を本来の方向、つまり贅沢の追求ではなくて人類すべてを物質的悪条件から解放することへ向け直さなければならない[10]。普通の人間が、複雑に見える人体の諸機構を単純な行為を意志することによって制御するのと同じ仕方で、「肥大した身体」としての機械群をも支配する絶対的に単純な「魂」が求められる。これが第二の方向である。

> 神秘主義の天才が現れたとしよう。彼は、自分の後ろに、すでに恐ろしく成長した身体を持ち、彼によって魂を変貌させられた人類を引き連れていくだろう。彼は人類を新しい種にしようと望む、あるいはむしろ一つの種であることから解放したいと望むだろう。（DS 332）

しかし、2-3 で述べたように「特権的人物」に先導されて進む人々、というイメージをあまり強く読み込まないほうがいい。ベルクソン自身「特権的な偉大なる魂の出現を当てにしすぎてはならない」（DS 333）と、くぎを刺すように述べているのだから。『二源泉』の終盤では、「人類が変容するのは人類自身がそれを欲するときだけである」（DS 311）「人類の未来は…人類にかかっている」（DS 319）「〔生の単純化を〕主導するのは人類

10 「巨大化した身体は魂による補完を待ち望んでおり、機械主義は神秘主義を要請するだろうということを付け加えよう」（DS 330）。

でしかありえない」（DS 328）といった表現が並び、人類のイニシアチブがことさら強調されている。もちろん、「特権的人物」にしか到達できない「神秘的直観」があり、それが薄められた形ではあっても伝わっているからこそ（DS 338）本来は一つの生物種として停止しているはずの人類は自分自身で前進することができるのだが、実際にそれをなすか否かは一人一人の意志にかかっている、というのがベルクソンの結論である。

おわりに

以上のような「単純な生への回帰」は今日でも「治療薬」「教訓」になり得るだろうか。いや、それ以前に、『二源泉』が刊行された当時にはなり得ていたのだろうか。厳しい評価も存在する。フィロネンコは、それが、「彼〔ベルクソン〕のコンテクストの外で把握された場合、危険な観念だった」[11]と述べる。ヴィシー政権が国民に対して求めたものこそまさに「単純な生への回帰」（田園の自然な生活への回帰）だったからだ。

また、ベルクソンの歴史観や時代診断－どう贔屓目に見えても大ざっぱで極めて限定的なものだ―が実態に即していたかどうかも改めて問わなければならない。そうした検証を重ねたうえで、ベルクソン自身がしてきたように、「単純さ」という概念を用いて状況に向かい合うことができるのか考えてみる（役に立たないので破棄するという選択肢も含めて）べきだろう。

参考文献

Chevalier, Jacques, et Bergson, Henri (1959). *Entretiens avec Bergson*. Paris: Plon.

Levinas, Emmanuel (1984). *Théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*. 5e éd. Paris: J. Vrin.

11　Philonenko (1994), p.388.

Philonenko, Alexis (1994), *Bergson, ou, De la philosophie comme science rigoureuse*, Paris: Editions du Cerf.

Waterlot, Ghislain (2012), « Luxe et simplicité dans la pensée politique de Bergson.Politique et mystique face à la guerre », dans Worms (éd) *Annales bergsoniennes* v, Paris: Presses universitaires de France.

Worms, Frédéric (2013), *Bergson ou Les deux sens de la vie*. 2e éd. Paris: Presses universitaires de France.

（にしやま・てるお　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

Retour à la vie simple chez Bergson

Teruo NISHIYAMA

A la fin de *Les deux sources de la morale et de la religion* (1932), Bergson souligne la nécessité vitale pour l'humanité entierère de retourner à la vie simple. Mais cette idée est bien obscure pour quelques raisons. Qu'est-ce que la simplicité? Quel est le rapport entretient-elle avec la vie? Pourquoi et comment retourne-t-on à cette vie simple? Le but de cet article est de préciser ces points en mettant au jours le caractère de la complication et le danger en lequel elle nous met toujours. A mesure que notre situation se complique, la vie individuelle et sociale devient de plus en plus difficile. Et en 1932, Bergson croiyait que l'humanité soit demi écrasé par son propre développement. C'est pour cela qu'il faut simplifier la vie.